

私と郷土と文学 ②4

沢木耕太郎の旅エッセイ集「旅のつばくろ」(新潮社)を読んだ。この中にひとり旅をする十六歳の沢木が津軽半島の龍飛崎に向かい、途中で引き返す話が出てくる。それから五十年以上が過ぎた夏、十六歳の自分が龍飛崎に立ったときの感慨を想像しながら、沢木は再び龍飛崎へと向かう。カバンの中には太宰治の「津軽」が入っている。

念願叶い龍飛崎に立つ。だが、「強い風の吹く中、いくら立ち尽くしても、少年のときの思いを甦らせることはできなかった」と述懐する。かけがえのない十六歳の沢木は、そこにはいなかったのだ。「あのとき引き返していなければ」と思っただかどうかは分からないが、ふと、学生時代の一コマが頭に浮かんで来た。当時の私は弘前に住み、ゼミ仲間と初

龍飛崎に立つ

めて龍飛崎を訪れた。季節は初夏だったと思う。風もなく晴天に恵まれ、崎の端に立つと、はるか向こうに北海道が見渡せた。雄大な自然を前に「ここが津軽海峡、この下に青函トンネルを掘っているのか」何かとつてもないものに飲み込まれそうなお気がした。青函トンネルができて久しい。函館まで新幹線も通った。崎の端には「津軽海峡冬景色」の歌碑が建っていると聞く。もし今、龍飛崎に立つたら、五十年以上の歳月が流れたことになる。あのときの感慨が甦るだろうか、それとも新たな感慨が湧いてくるのだろうか。「旅のつばくろ」が旅情を誘う。(其田敏美)

「私と郷土と文学」の原稿募集約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

編集室の窓から

新型コロナウイルス感染症の拡大防止が最優先された令和2年度は、友の会会報は対面の打ち合わせを少なくして3回発行、読書会は三密を避ける形で、後半2回行われました。

ワクチン接種が始まったこの春、新たな気持ちで新年度を迎えるにあたり、友の会新規会員を募集しています。会員は更新手続きをお願いします。また、友人

にも呼びかけていただければ幸いです。

5月初めには、新緑に囲まれる講習室で友の会総会が開催され、和やかな話し合いが行われます。その後、特別展について学芸員の解説を聞きながらの見学もありますので、誘いあわせての参加をお待ちしています。

「文友の部屋」は1500字程度で会員のみなさまの声を募るコーナーです。おすすめの本、映画、演劇等の感想をお寄せください。(近)

文学の杜

仙台文学館 友の会会報

第65号

令和3年3月20日発行

仙台文学館友の会(仙台文学館内)

〒981-0902

仙台市青葉区北根2丁目7の1

電話 022(271)3020

仙台文学館のホームページ

https://www.sendai-lit.jp/

新年度は写真展「星野道夫」でスタート

2021年度展示 秋は「ぼのぼの」

2021年度の春は写真展「星野道夫 悠久の時を旅する」で始まります。星野道夫氏は、アラスカの大自然に生きる人間や野生動物、そして語り継がれる神話に魅せられた写真家です。取材中の事故で亡くなるまで、心打つ大自然や動物の写真を撮り続けました。本展では20歳で初めて足を踏み入れたアラスカの村の記録から、亡くなる直前まで撮影していたロシアのカムチャツカ半島での写真など、星野氏自身のことばとともにご紹介いたします。

夏休み子ども文学館は、昨年コロナ感染拡大防止のために延期をした「みちのく妖怪ツアール」展を、児童文学者佐々木ひとみ、野泉マヤ、堀米薫各氏のご協力のもと開催します。

秋は仙台在住の漫画家・いがらしみきお氏の代表作「ぼのぼの」の連載35周年を記念して、特別展「ぼのぼのの杜」を開催します。主人公のラッコ「ぼのぼの」はじめ、「シマリスクン」や「アライグマくん」など個性的なキャラクターが繰り広



撮影：星野道夫

げる日常には、ぼのぼのとしたり取りから哲学的な思想、不条理なギャグまで、さまざまな要素がちりばめられ、日本のみならず、海外にも多くのファンがいます。展示では貴重な原画をもとに、作品の魅力を様々な切り口でご紹介します。

冬の企画展では、文芸評論家で思想家の高山樗牛と仙台を代表する詩人・土井晩翠の二人を取り上げます。東京帝国大学在学中に「滝口入道」を発表し、「帝國文学」「太陽」などの編集にあたった樗牛は、晩翠が詩人として世に出る道筋をつけた人物でした。旧制二高・東京帝国大学の先輩・後輩の間柄だった二人の知られざるエピソードを取り上げながら、仙台の街に刻まれた二人の交流のしるしをご紹介します。毎年恒例の新春ロビー展「100万人の年賀状展」は20回目の開催となります。

講座やイベントでは「佐伯一麦エッセイ講座」や「佐伯一麦 北根ダイアローグ2021」を予定しています。また「仙台文学館ゼミナール」では毎年好評の講座に加え、昨年惜しくも中止となった「落語を味わう」を開催します。「ことは祭典」は開催方法を見直し、事前応募

風と歩こう ②4

二番手のコートを羽織って出かけよう。旭ヶ丘下車、大池を目指す。彫刻の鳩たちの、全ての線が柔らかな。冬の間、張り詰め縮こまって無機質だったものが、光の手で優しくほぐされ、命を宿し始めたかのようにだ。撫でてみる。ずっと手を当てていたいような暖かさだ。指先にうっすらと埃がついた。「光るものより置き初むる、か」と呟いて、フツと周りをみる。鳩に触って一人言を言っていたら、怪しまれてしまふ。少し早足で先に進む。

大池の周りをゆっくり歩く。見上げる、コナラの枝が光を受け止めるように、抱くように、ふんわりと空に伸びている。梢を薄紅色に染めバレイリーナの腕のようにだ。視線の高さでビラカンサが真上に枝を突き出している。「ハイ、ハイ」と元気に手を上げる子供達の姿を想像させる。その下でタンポポやカタバミが葉を広げている。落ち葉の布団をはいで、両手を広げて大あくびかな。「また怪しい人になつてるよ」と自戒しながら歩き続ける。(和)



Photo by Ryuji Sasaki

編集後記

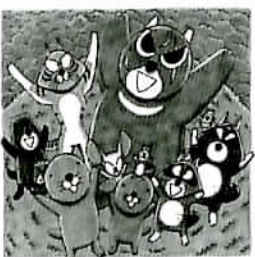
仙台文学館友の会会報「文学の杜」第65号をお届けします。

▽今年度の大学受験生はコロナ禍や天候不具合、おまけにガツンと来た地震で心身ともに負担が大きかったことであろう。せめて雪の不安を考えなくてもよい季節に置き換えることはできないのか。毎年この時期になると気にかかる。それでもここを超えて特別に強く大きくなれと願うばかり。(一)

▽赤いラナンキュラスの切り花を買ってきた。花瓶に入れて窓辺に2、3日置くと、弱々しく垂れ下がっていた細い茎の小さな蕾たちが、少しずつ顔をもち上げ咲き出した。折れ曲がったまま咲く蕾もある。意外に力強いその姿に見入ってしまった。コロナ禍でなければ見過ごしていたかとも思っている。(近)

▽雪が降ったり日が差したり、今日の天気は忙しい。不要不急の外出は控えるとしても、必要火急の用はある。持病の薬は、どうしても取りに行かなければならない。雲行きをうかがいながら出かける支度をやる。そう、帰りに朝市でコロッケを買ってこよう。昼ご飯の小さな楽しみが、背中を押してくれる。(和)

▽寒い冬でした。例年使っている布団では足りず、夜中に起きてカイロを貼った夜もあったほどです。思えば、70年前の子供の頃、雪は今よりずっと多く降り、暖房の設備もなく厳寒だったはず。今、あの頃の冬に戻ったら耐えられるのだろうかと思う。春がもう来ていますね。(佐)



いがらしみきお 竹書房

の形式に変更をして行います。残念ながら窮屈な日々はもう少し続くようです。気持ち疲れた時には、展示に足を運び気分転換をしてみたり、緑を眺めながら本を読んだり、または「ひざしの杜」で一息ついてみてはいかがでしょうか。仙台文学館では感染症対策を取りながら、皆さまの来館をお待ちしています。(芸芸室長 渡部直子)

仙台文学館2021年度展示予定

- ◆写真展「星野道夫 悠久の時を旅する」 4月17日(土)～6月27日(日)
- ◆夏休み企画 子ども文学館えほんのひろば「みちのく妖怪ツアール」展 7月17日(土)～8月22日(日)
- ◆特別展「ぼのぼのの連載35周年記念 ぼのぼのの杜」 9月18日(土)～11月28日(日)
- ◆新春ロビー展「100万人の年賀状展」 1月10日(月・祝)～2月13日(日)
- ◆企画展「高山樗牛と土井晩翠」 1月15日(土)～3月21日(月・祝)

\*タイトル、会期は予定です

文友一滴

新型コロナウイルス禍で外出制限や自粛が長く引くと、家族が顔を合わせる時間が増えたことにより、虐待や暴力も増えているとメディアで伝えられた。私は以前聞いたラジオの悩み相談を思い出した。二十代前半の男性の悩みは、親との関係が悪くエスカレートする一方で、このままだと自分を押し入れず暴力をふるってしまうという内容だった。

そのあとの回答者の話がとても興味深かった。それは一番の解決法としては別居が望ましく、次に親しい他人に間に入ってもらおうという方法もあるけれど、どちらもかなわらないなら、親とどきどきは敬語を使う、ということだった。敬語は言葉数が多いため、暴力をふるいそうな気持ちに緊急避難的なブレーキをかける効果があると。それでも親の側からは当面けんか腰の言葉が返ってくるだろうが、相談者が敬語を使い続けるならば、親の態度もだんだん変わる可能性がある。物理的に距離をとれないなら言葉で距離をとるとのこと。敬語に防御壁の役目をもたせるという発想に、私は心の中で唸ってしまった。いままでこんな相談の回答を聞いたことも読んだこともなかった。

「長男に申し上げたと……」緊張を強いられる場面、時々こんな言い方をしてみよう。訂正する余裕もなかったりする。大人にしてこようである。ため口に慣れた若者が、急場には敬語を話せるかと思った。言葉で距離をとることが、時間がかかることは分かった。(近)



# 「佐伯一麦 北根ダイアログ2020」 — 歌人 小池光に聴く —

## 文学をめぐる対談の醍醐味を味わう

佐伯館長が各分野の方を迎えて対談する企画がスタートした。第一回は、歌人の小池光氏を迎えて、仙台文学館新旧館長ダイアログとなった。

佐伯館長が、仙台文学館の場所が良く分かるようにタイトルに北根と地名を入れたことを話すと、小池氏は「この頃は駅からタクシーに乗ってもすぐ分かるようになって来たね」と応じて、まずは文学館が認知されてきたことを喜び合う。前任の館長としての感想を問われると、小池氏は「スタッフが優秀なので、13年間私は何もしなかったんですよ」と笑いを誘い、そこに新館長への心遣いと励ましが見えて、ふっと場が和むのを感じた。

こうした文学をめぐるやりとりは、いくつもの層から成り立ち、深みを帯び、聴く者に対談の面白さを充分に感じさせてくれた。次回への期待が膨らむ。文学表現に関する言葉の数々が、印象深く心に残った。

- ①自分の中に他者を置く。作品に自己陶酔してはいけない。
- ②作品を寝かせる。一晩おくだけでも見えてくるものがある。
- ③言葉は単なる言葉ではなく、そこにニュアンスを込めるのが文学。
- ④ありふれたもの、言葉にならないものに言葉を与えて行く。
- ⑤作品は生きもの、超絶技巧の工芸品ではない。
- ⑥表現は人間が問われるものである。

2020年11月22日開催 (佐)



文学館の講座に話題が進み、短歌講座の様子小池氏のユーモアに包まれた磊落な語り口で紹介される。「短歌の第一歩は大胆にスパッと削り落して行くことなのだが、作者は自分の言葉に愛着があるため、なかなか削ることができない」と。「短歌であれ、散文であれ、文章表現には発想、テーマがまずあってそこから始まる。発想は音楽で言えば作曲のようなもの。その曲をどう聴き手に伝えるかが演奏者の腕にかかる。つまり文章で言えば言葉を削ったり、順番を入れ替えたり、リズムやテンポを考えたりすること。文学者は作曲と演奏の両方の役割を担うんです」と佐伯館長。

### 第46回読書会

## 大人になった息子の現実

### スタインベック「逃走」

「アメリカ文学の巨人」と言われ、彼の作品は「西洋文学の古典」とも称される。1962年にはノーベル文学賞を受賞している著者の短編である。

カリフォルニアの荒れ果てた海岸にへばりつくような農場で暮らすトレス一家。母親は19歳のべべが大人になるのを待っている。

ある日べべは不覚にも殺人を犯してしまい、追っ手を逃れて帰宅した。決然と

した目、ひきしまった唇、息子の顔つきが精悍な大人の男に変わったことを母親は見のがさなかった。そして同時に、息子がこの家に帰って来ることはもうないのだと直感する。逃走が始まる。心理描写を削ぎ落とし、逃走の過酷な情景だけが克明に描かれ、その臨場感に緊張する。追っ手の影、崩れ落ちる馬、かすめる銃弾、コヨーテの叫び、迫る危機から脱出しようと苦闘する息子の姿が、なぜかそこに居ない母親の深い悲しみを見せるのだった。

12月9日、5名出席。(佐)

### 第47回読書会

## 言葉の裏に人間への鋭い洞察

### 佐野洋子「神も仏もありません」

イラストレーター、絵本・童話作家、エッセイスト、小説家として活躍し、2010年に亡くなった著者の、小林秀雄賞を受賞したエッセイである。

著者の人間関係が飾ることなく自然体で書かれ、言葉の裏に他者への思いやりが垣間見える一冊である。

会員の感想は次のとおり。  
・切り口鋭いエッセイではないが、



次回読書会は4月14日(木)14時  
小川系「ツバキ文具店」(幻冬舎文庫)

日常的で同調できる部分もあつた。  
・年をとっても変らない人のよう、あまり面白くないと思わなかった。  
・諦観というのか、こんな生き方がいいと思つた。  
・誰でもそうなんだと安心し、自分も今の生き方でいいのだと思えた。  
・孤独なようでそうではなく、読みやすいのに力がある。  
・荒い文だと思つたが、その中に正直さが見えて惹かれた。  
2月10日 新会員を迎えて7名出席。(佐)

※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。

## 「腹を抱へる」

丸谷才一

### 本を片手に



自爾生活は新しい楽しみ発見でもある。昨年から、月2回ほど旅に出ている。初めの二、三回目までは、パソコンの設定に手間取り、緊張もした。かしまって画面を見ている自分に気付いたりもした。でも今は、その国の、その地方の名物などを留意して、食べたり飲んだりしながらツアーに参加している。こんなことが無ければ、アフリカのサファリや北極圏オーロラツアーなどは実現しなかったと思う。

さて、例えばそれらが実現したとしよう。現地までは、たぶん飛行機でしょうね。機上での長い時間をどう過ごすか。機内食を食べるとき以外は、連れがいても案外話さないものだ。連れがアイマスなど持ち込んでいたら、もう黙っているしかない。映画を片っ端から見るという手もあるが、結構飽きてくるものだ。そんな時は読書に限る。

イヤホンをして、耳に心地よい音楽を選ぶ。そして、おもむろにページを開く。といっても持ち重りのする単行本では無い。旅にはやはり文庫本だ。小説もいろいろ、この一冊は必需品です。どこから読んでもいい、つまり乗が不要なのだ。乗って、読んでいて落としたりしませんか。私はよく落とします。狭い機内だと拾うのが大変です。だから、ぱっと開いたところから読み始められる。これがいいのです。そして、どこを読んでも面白くて興味深い。突っ込み甲斐も結構ある。目次を読むだけでも楽しいのだ。

例えば「酒中閑談」は酒の席でいかに会話を楽しくかという話題だ。読んでみると、あの人と会ったらどんなクイズを出そうかな、と考える。その時間も楽しい。「井物への道」では「ピフテキを食べ終ると……皿の中の僅かな肉汁にほんの少量、御飯をいれて、一口、食べるのである」と、食欲が刺激される。

もう一冊選は誰にしようか。そうだが冒険小説にしよう。ローズマリー・サトクリフの「第九軍団のワシ」を連れて行く。

### 「腹を抱へる」

丸谷才一エッセイ傑作選Ⅰ 文春文庫 (租)

## 100万人の年賀状展終了

1月10日から2月14日まで、恒例となった新春ロビー展「100万人の年賀状展」(仙台文学館主催、仙台文学館友の会共催)を開催した。当初は、例年通り11日までの予定が、好評のため14日まで会期を延長した。今年で19回目。今年も、新型コロナウイルスの収束を願った内容のものが多く、妖怪アマビエを描き、疫病退散の文字が添えられたものなどが寄せられた。テーマ部門の「コロナ禍の後、これがやりたい」には、孫に会いに行きたい、満員のスタジアムで大きな声でイーグルスの応援をした、海外にいる家族のもとに里帰りの旅がしたいなど、それぞれの思いが込められた。

作品の総数は、前年を200点近く上回るおよそ700点が寄せられた。遠くは神奈川、静岡、兵庫、広島などからも届いた。

来年は節目の第20回を迎える。新春のすがすがしさの中で、小さな紙面に書いたためた言葉の交流を楽しむ参加型企画として、今後も続けていきたい。

